

「總持寺展」記録

鶴見大学仏教文化研究所所員 岩橋 春樹

平成二十三年は總持寺が能登から鶴見の現在地に移転して二〇〇年にあたり、それを記念して總持寺所蔵にかかる代表的文化財を紹介する特別展「總持寺名宝一〇〇選」が神奈川県立歴史博物館で開催された（平成二十三年四月十六日～五月二十二日）。

曹洞宗大本山總持寺、鶴見大学仏教文化研究所、神奈川県立歴史博物館の三者共催による展覧会であつたが、実質的な事業主体は曹洞宗大本山總持寺であり、企画から開催に向けての実務は總持寺宝物殿が主に担当し、岩橋がまとめ役をつとめた。そこで、後日のために途中経過等の要点を記録しておくこととしたい。

なお、本稿の短縮版を「文化財学雑誌」（鶴見大学文学部文化財学科）にも収録している。

一、御移転一〇〇年記念事業

この展覧会の基本趣旨は御移転記念事業という点にあり、事の発端は總持寺山内からということになる。御移転一〇〇年を迎えるにあたって、山内では各種記念事業が検討され、その一つとして実現したものである。

記念事業に関しては、その具体的な企画立案のために実行委員会が設置され（平成二十一年四月）、岩橋も宝物殿館長という立場から委員会に参加を要請された。また、総持学園からは落合事務局長も参加している。委員会は月一回、本山役寮も加わつての定例開催である。

実のところ、委員会に直接属したことは幸いであつた。早速、展覧会の概要、概算費用等を提案、説明したところ、記念事業の採択第一号として満場一致で承認されたのである。委員会の外にあつて、人を介して話を上げていたのは、これほどすんなりとは決着しなかつたのではないかと思う。

展覧会企画案の概要は、会期を記念事業の期間中（平成二十三年四月～十一月）の冒頭に配置すること。会場を神奈川県立歴史博物館とし、共催の特別展とすること。しっかりとした図録を制作、頒布すること。それ相応の予算が必要となること等である。会場について、本山との関係から、神奈川県新聞プロデュースとそう美術館という考え方は無いのかという意見も一部から出されたが、大本山とデパートは馴染まないという理屈をもって企画案通りに了承いただいた。

二、神奈川県立歴史博物館

神奈川県立歴史博物館に対しては、あらかじめ内々に打診はおこなつてあつた。御移転記念事業がおのずから予想されたからである。確か開催の三年ほど前、平成二十年夏の頃ではなかつたかと記憶している。具体性の無い漠然とした打診というわけにもいかなないので、本山の要所には下話をして、基本的な理解は得ておいた。

結果として、平成二十三年の年度初め、四月から五月の連休にかけての一ヶ月間を仮りおさえることができ、細かな条件等は以後の検討課題ということとなつた。急な持ち込み話で先方には少々迷惑をかけたかもしれないが、年度初めというのは旧年度と新年度の狭間にあたり、一般的には予算執行が面倒になるため、大きな催事は入れていないはずという読みもあつた。何れにせよ先々の企画予定の日程変更、調整等に御手数をかけたには相違なく、まことに感謝というほかない。

鶴見からの出開帳としては近距離に過ぎるため、東京国立博物館も考えないではなかつたが、いかんせん東博の展

示場は広大であり、残念ながら總持寺の持ち駒が絶対的に不足しているため、これは断念した。それに対し、神奈川県立歴史博物館の特別展会場はほどほどの面積で二区画に分かれており、まことに好都合なのである。

そのほか、江戸東京博物館と根津美術館も候補に数え、特に根津美術館は茶道、華道関係グループの協力が期待された。しかし、同館では五月連休中心に燕子花図屏風（尾形光琳・国宝）特別公開が動かせぬ展観として組みこまれており、これも早々に断念した。

三、共催展覧会

当初、總持寺と神奈川県立歴史博物館、両者の共催展と考えていたが、最終的には鶴見大学仏教文化研究所を加えての三者共催というところに落ち着くこととなった。仏教文化研究所の事業実績にもなり、大学の広報宣伝にもなるであろうという判断である。何となく研究所が割り込むのも具合が悪いので、本山から禅師名をもって学園理事長宛に「物心両面」での協力依頼の文書（平成二十一年十一月十七日付）を発行することで形を整えた。

三者共催ともなると、いくつか課題も生じてくる。その一つはそれぞれ三者の名称の並び順であった。どうしても良いといえば、それまでながら、往々にして悶着のものになりかねない。結局、曹洞宗大本山總持寺、鶴見大学仏教文化研究所、神奈川県立歴史博物館の順に列記することで大方の合意を得た。そして、更に大きな課題はそれぞれの役割分担、直截に申せば費用負担である。これに関しては三者の意向が相反する懸念もあるので、岩橋が次のようにとりまとめた。

總持寺は展覧会にかかわる直接経費（運送、印刷物制作、一部展示品の応急修理等）、仏教文化研究所は事前調査経費（展示品の調査、撮影等）、神奈川県立歴史博物館は会場経費（展示場設営、看板・垂幕制作、講演会実施等）というのが概要で、併せて総額二五〇〇万円ほどの予算規模である。その他、歳入面では観覧料を博物館の収入とす

る一方、図録等売り上げは總持寺の収入とするという単純路線で割り切ってしまった。

これらの詳細は最終的に確認書（覚書）を三者間で取り交している。大学事務当局の一部には、歳入面で大学に不利な内容ではないかという不満の声もあったようであるが、大学の広報宣伝に資するところ大であるということ御了解いただいたものと考えている。

四、実務スタッフ

各種事務処理から開催までの実務にあたるスタッフは總持寺宝物殿（岩橋、遠藤、内藤）を中心に、神奈川県立歴史博物館学芸部の薄井和男（学芸部長、現館長）、小井川理、両氏を加えた五名の固定、責任メンバーとした。このほか、漆関係の品物の調査と若干の直し等に文化財学科の加藤寛氏、写真撮影には博物館の井上久美子氏の協力を得ている。仏教文化研究所が加わっていないように見えるが、岩橋と加藤氏は仏教文化研究所の所員を兼ねているので、三者共催という立て前には齟齬していない。

宝物殿の遠藤、内藤にとつては初めての他流試合となる。全国各地の所蔵先から多数の品物を借りまくるわけではないから、通常の特別展開催よりは楽な仕事であるが、学芸員修業の良い機会であった。博物館との細かな調整、美専車に乗って片道十時間の能登往復、各種業者への指示、撮影の立ち会い、図録の原稿執筆等々、仕事の頭出しは岩橋がおこなったが、後は二人に任せるようにしたつもりである。

五、展示計画

展示品の選択から展示計画の立案に際しては一工夫が必要であった。先にも触れたように持ち駒が十分とはいえなかったからである。また、總持寺所蔵の文化財はその属性が大きく二つに分かれ、開創以来の伝世品と鶴見移転後に

檀徒、篤志家などから寄進された品が混在しているという難もあった。後者には古代インドの石仏から神道美術、あるいは現代美術まで含まれ、それなりに見るべき品々ではあるけれども、雑然とした羅列展覧会になりかねないのがある。

そこで、博物館の展示場が二区画されているのを利用して、一方に伝世品、いま一方に移転後の蒐集品、両者を明確に分離して展示することとした。これによつて瑩山紹瑾像、十六羅漢像等の伝世した禅宗文化財と、それに対する新規の寄進品であり非禅宗的な蔵王権現像、密教法具、あるいは棟方志功の屏風等とをそれほど違和感なく一つの展覧会に納めることができたように思う。由緒ある禅院の展覧会として筋を通し、内容純化することはできなかったが、それなりに總持寺らしい多彩な、こだわりの無い展示であつたと苦し紛れ気味に振り返つておこう。

加えて、特別奉祝出品をお願いした能登祖院の観音像、大船観音寺の同じく観音像が古仏の格調を漂わせ、全体の引き締め役をつとめてくれた。こうしたポイントとなる存在が展示には必須である。

六、展示品修理

展示品に関して、いまひとつ問題となつたのは保存状態の良好でないものが少なかつたことである。本格的な修理は費用的にも、時間的にも不可能であるため、応急修理をほどこす必要があつた。応急修理と言えば聞こえは良いが、所詮は一時しのぎの化粧直しでしかなく、保存修理業者には嫌がられる半端仕事である。といつて、美術商下請けの直し専門、安からう業者に任すわけにもいかない。

結局、掛幅類は半田九清堂、彫刻類は明古堂に依頼することとなつた。点数が多かつたため、この部分には思わぬ出費を強いられ、あらかじめ用意した予算を若干超えている。掛幅の内、峨山韶碩の頂相については、数年後に予定される峨山禅師遠諱を見越して本格修理とした事情もあつて、総計一〇〇〇万円近くを要した。

七、展覧会図録の制作

図録の制作進行に関しては、岩橋に一任ということで博物館側には了解願った。その都度協議調整しながらでは作業効率が悪いというのが一つの理由。また、展覧会図録ではあるけれども、總持寺の出版物であるという基本原則に立ち、それを博物館へ持ち込むという形を明確にしておきたかったからでもあった。

そして、業者への発注も印刷会社へ直接ではなく、有隣堂出版部への編集委託という少々変則の方式をとることとした。出版部の面々とは旧知の間柄であり、相互の考え方も熟知している。編集委託とはいいながら、実質的には作業サポートをしてもらったところである。余計なトンネルを介在させたようであるが、当方の負担が軽減され、大いに助けられた。ともかく東戸塚にある有隣堂には頻繁に足を運んだ。

図録の大枠の考え方としては、総二〇〇頁以内、図版中心に解説を付し、小論考を数本加えるというものであった。制作費は五〇〇万円見当として、刷数三〇〇冊（余裕があれば三〇〇冊ほど増刷）、頒価を二〇〇〇円程度とする。その他、寄贈用途として、博物館には四〇〇冊、仏教文化研究所には一〇〇冊の買い取り費用を、それぞれの予算にもぐりこませてもらっている。また、有隣堂書店の主要店舗に若干部数を置いたが、これは寄与するところが少なかった。

八、東日本大震災の影響

万般順調に準備が進行した中で、不測の事態が発生したのは最終段階であった。平成二十三年三月十一日、例の東日本大震災である。展覧会立ち上げの一月ほど前となる。直接の被害は無かったとはいえ、諸々の影響を受けてしまった。

最も困惑したのは、製紙工場（八戸市）の被災によって図録印刷用に確保してあった用紙が使用不能になってしまったことである。三月半ばに印刷、月末に納品という手はずが頓挫する。それでも関係者の努力によって何とか調達

のめどがたち、大幅に遅れながらも開催直前の納品にこぎつけたのであった。

展示作業の場面では余震が時々あり、どうにも嫌な感じであったのを思い出す。彫刻や工芸品の設置について、常よりは嚴重な地震対策はほどこしたが、リスク覚悟の展覧会として開き直るしかなかったというのが本音である。

世の中全体の自粛ムード、万一の場合の事故を考慮して、当初は予定していたテープカットや内覧会は取りやめ。入館者数も四月中はいまひとつ伸びず、五月に入って何とか取り返すという結果となったのもやむを得ないところであった。

九、今後に向けて

展覧会は無事終了したが、そのまま完結させてしまうのは本意でない。おのずから今後に向けて、いささかの展望を持つての展覧会開催であったということである。總持寺の立場からは、宝物殿を博物館として明確に位置付け、施設の再整備を企図する。仏教文化研究所、ないし鶴見大学の立場からは、付属の博物館設置を模索する。何れも直ちに実現できることではないけれども、そのあたりが狙いである。

これとは別に、總持寺当局では宝物殿の運営見直しが検討されており、その一つの課題として宝物殿運営の外部委託がある。外部というのは鶴見大学の・・・というニュアンス含みである。尤も現在の宝物殿スタッフが文化財学科の在籍者、出身者であるという実態をふまえるなら、制度整備すれば良いわけで、外部委託はそれほど難しい話ではない。

仏教文化研究所、大学が博物館を自前で設置することは現実論として考えにくく、これといった博物館コレクションを欠いているのも致命的である。結局、博物館活動という観点からは文化財学科との連携強化が最も望ましい方向性ではなからうかというのが当面の結論である。

資料① 展覧会概要

1 名称 御移転一〇〇年記念 能登から鶴見の地へ

曹洞宗大本山 總持寺名宝一〇〇選

2 主催

曹洞宗大本山總持寺

鶴見大学仏教文化研究所

神奈川県立歴史博物館

3 会期 平成二十三年四月十六日（土）～五月二十二日（日）

4 会場 神奈川県立歴史博物館 横浜市中区南仲通五―六〇

5 展示

・伝世の文化財

・近代蒐集の文化財

付、仏具紹介、御移転関係資料等

・特別出品

輪島市指定文化財 観音菩薩坐像 一軀 總持寺祖院

鎌倉市指定文化財 観音菩薩立像 一軀 大船観音寺

6 関連行事

・記念講演会 於、神奈川県立歴史博物館講堂

總持寺の歴史―中世を中心として 納富常天氏 四月二十三日(土)

三橋鎌岳作鎌倉彫前机修理報告 加藤寛氏 五月七日(土)

・大本山總持寺山内めぐり

諸堂拝觀と著名人墓所紹介 四月二十二日(金)

・ギャラリートーク

四月二十四日(日)、五月一日(日)、八日(日)、十五日(日)の計四回

7 観覧者 一三、一三九人(有料観覧者数)

8 関連業者 株式会社有隣堂出版部

図書印刷株式会社

山九株式会社 東京支店美術イベントグループ

神奈川県立歴史博物館ミュージアムショップ

株式会社半田九清堂

株式会社明古堂

資料② 出品目録

重要文化財

1 瑩山紹瑾像 一幅 絹本着色 鎌倉時代 元応元年（一二三九）自賛

2 峨山韶碩像 一幅 紙本着色 江戸時代

横浜市指定文化財

3 象山徐芸像 一幅 絹本着色 江戸時代

横浜市指定文化財

4 前田利家像 一幅 絹本着色 江戸時代

重要文化財

5 前田利家夫人像 一幅 絹本着色 江戸時代 象山徐芸賛

6 釈迦三尊像 一幅 絹本着色 室町時代

7 釈迦三尊像 雲谷等璠筆 三幅 紙本墨画淡彩 江戸時代

横浜市指定文化財

8 十六羅漢像 十六幅 絹本着色 鎌倉時代（内、四幅は江戸時代）

9 蘆葉達磨・墨梅図 三幅 絹本墨画淡彩 中国・元時代

10 三宝大荒神像 一幅 紙本着色 室町時代 文安三年（一四四六）銘

重要文化財

11 提婆達多像 一幅 紙本着色 朝鮮・高麗時代

- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|---------|------------|------------|---------|--------|--------|-----------|--------|------------|-----------|-------|---------|--------|-------------|---------|
| 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 |
| 前田利家朱印状 | 天童如浄和尚録 | 瑩山清規 | 伝光録 | 總持寺住山記 | 峨山法嗣目錄 | 峨山韶碩置文 | 定賢寺領敷地寄進状 | 觀音堂縁起 | 六角形桐文木画菓子器 | 刺繡獅子吼文大法被 | 鎌倉彫前机 | 前田利家坐像 | 釈迦如来坐像 | 鶴岡板戸 | 日月蓮池図 |
| 一通 | 四冊 | 一冊 | 五冊 | 折本百四十一冊 | 一卷 | 一幅 | 一幅 | 一卷 | 一合 | 一鋪 | 一基 | 一軀 | 一軀 | 二面 | 二幅 |
| 紙本墨書 | 紙本墨書 | 紙本版本 | 紙本墨書 | 紙本墨書 | 紙本墨書 | 紙本墨書 | 紙本墨書 | 紙本墨書 | 木造 | 江戸時代 | 木彫漆塗 | 木造 | 木造 | 佐藤紫煙筆 | 絹本著色 |
| 桃山時代 | 鎌倉時代 | 明治四年(一八七二) | 明和四年(一七六七) | 室町、明治時代 | 南北朝時代 | 南北朝時代 | 鎌倉時代 | 鎌倉時代 | 明治時代 | | 大正時代 | 中国・清時代か | | 大正十一年(一九二二) | 朝鮮・李朝時代 |
| 天正十八年(一五九〇) | | 以前 | | | (一三六六) | (一三六四) | (一三三二) | (一三三二) | | | | | | | |

横浜市指定文化財

重要文化財

重要文化財

- 28 能州諸嶽山總持禪寺図 一鋪 紙本著色 江戸時代
- 29 大本山總持寺全景 一枚 紙本版画 大正十一年（一九二二）
- 30 宝冠釈迦如来坐像 一軀 石造 古代インドか
- 31 達磨大師坐像 一軀 木造 桃山〜江戸時代
- 32 達磨大師坐像 一軀 木造 江戸時代
- 33 小金銅仏 八軀 銅造鍍金 中国・唐時代
- 34 愛染明王坐像 一軀 木造 江戸時代
- 35 二王立像 二軀 木造 室町時代
- 36 地藏菩薩立像 一軀 木造 江戸時代
- 37 大黒天立像 一軀 木造 江戸時代
- 38 蔵王権現立像 一軀 木造 平安時代
- 39 蔵王権現立像 一軀 銅造 鎌倉時代
- 40 男神坐像 一軀 木造 平安〜鎌倉時代
- 41 大將軍坐像 一軀 木造 平安時代
- 42 不動明王種子懸仏 一面 銅造 鎌倉時代 弘長二年（一二六二）銘
- 43 千手観音三尊懸仏 一面 木造 鎌倉時代 弘長元年（一二六一）銘
- 44 多宝塔型舍利器 一基 銅造 江戸時代
- 蓮柱型舍利器 一基 銅造 江戸時代

横浜市指定文化財

- 蓮華型舍利器 一基 木造 江戸時代
- 45 五鈷鈴 一口 銅造鍍金 鎌倉時代
- 46 蓮華唐草文柄香炉 一柄 銅造鍍金 南北朝時代
- 47 舟形光背 一面 銅造鍍金 室町時代
- 48 浄瓶 一口 銅造 朝鮮・高麗時代
- 49 浄瓶 一口 銅造 朝鮮・高麗時代
- 50 蓮形香炉 香取秀真作 一合 銅造鍍金 明治～大正時代
- 51 黄交趾焼香炉 永楽妙全作 一合 明治～大正時代
- 52 真葛焼瓢形花器 二代香山作 一口 大正～昭和時代
- 53 九谷焼茶器 一式 明治時代
- 54 釈迦十大弟子柵図屏風 棟方志功作 六曲一双 紙本版画 昭和十四年（一九三九）
- 55 散華原画 加山又造筆 五枚 紙本著色 平成二年（一九九〇）
- 輪島市指定文化財
- 56 観音菩薩坐像 一軀 木造 鎌倉～南北朝時代
- 鎌倉市指定文化財
- 57 観音菩薩立像 一軀 木造 平安時代

※17は大形の品であるため、写真パネルによる代替展示。

資料③ 印刷物

1 図録



「總持寺展」記録



3

チラシ②



2

チラシ①表 (ポスター共通)



